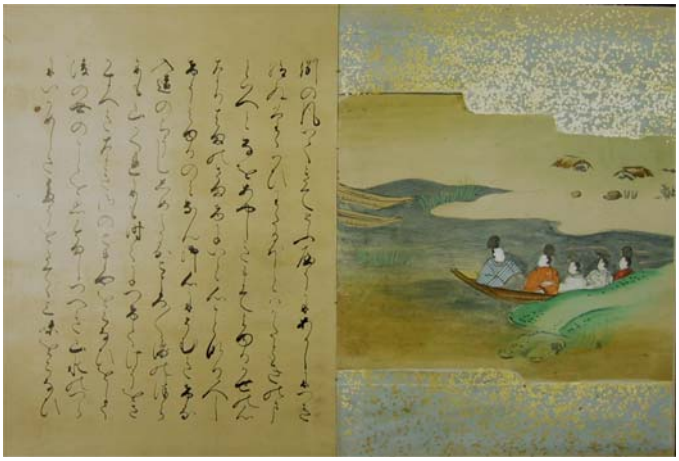
2006年7月20日　第122号

目　次

貴重書紹介『奈良絵本源氏物語　明石』　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 1
風と帆船　　元航海訓練所所長　荒川　博　・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 2-3
図書館からのお知らせ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　p. 4

貴重書紹介『奈良絵本源氏物語　明石』


（明石の浦へと船出する光源氏）

船乗りとして勇名轟く荒川先生が帆船に関するエッセイをお寄せ下さったので、船の書物を探してみたものの残念ながら適当な資料なく、古典文学中より多少は海に縁のある作品を選び､解題を付すこととした。題材は、源氏物語明石の巻。

列帖装1冊、江戸時代前期写。金泥にて水辺・楼閣等を描き金銀切箔を蒔いた紺紙表紙（縦23.8、横17.7糎）。左肩に朱地金泥草花文様題簽（縦14.8、横3.5糎）を押し、本文と同筆にて「あかし　十三」と墨書、かすかに押発装の痕跡が見える。見返し、金布目紙。巻首に遊紙１丁、次丁オモテより毎半葉10行18字程度書写、和歌1首2字下げ2行書き、下句は上句よりさらに１字低い。精良な斐紙を用い、墨付54丁。最終丁はオモテ５行目までで本文を終了。第5丁ウラ・12丁ウラ・25丁オモテ・30丁オモテ・34丁オモテ・50丁オモテに極彩色の絵を合計6面配する。絵の前を散らし書きとして余白が生じないようにするのは、奈良絵本にしばしば採用される手法。

本文および絵の特徴から､慶安3年(1650)山本春正跋の絵入源氏物語に依拠したものと推定される。奈良絵本に基づく整版本制作が早い時期に見られるけれども、掲出本のように絵入整版本を奈良絵本化した作例も、長恨歌・源氏小鏡・竹取物語などいくつか知られている。掲出本は、巻の内容に合わせて各冊表紙文様に変化を持たせ、朱題簽を押し金銀装飾を施した豪華なもの。源氏物語全巻揃いの奈良絵本は非常に稀であり､当館では残念ながらツレの賢木とあわせ2冊を蔵するのみ。

風と帆船

元航海訓練所所長
荒川　博

１.三種類の人間

紀元前６世紀スキタイの賢者アナカルシスは、「この世紀には三とおりの人間が見られる。生きている人間、死んだ人間、それに船で海を帆走る人間がそれである」と言っております。

この「帆走る」について、『コウルリヂ詩選』「老水夫行」(斎藤勇・大和資雄訳, 岩波文庫, 1981年 第23刷)によれば、第一曲・欄外解説(marginal gloss)、第五曲にそれぞれ

「水夫は順風に乗じ、晴天の下に帆走りて、終に赤道に達したる由を告ぐ」

「静かに帆走り、真晝にいたれど、そよ風　曽て　そよとも吹かず（以下略)」

と使われております。

(Coleridge, S. T. *The rime of the ancient mariner*. London：George & Harrap , 1910. Illustrations by Willy Pogany)

一方、三種類の人間について、細川元首相は、母校上智大学の講演で、プラトンの言葉として、「死んだ者、ただ生きているだけの者、海に向かって旅立つ者」があり、その海とは、「理想・夢・ロマン・志」を指し、つまり理想主義の重要性を説いたという新聞記事を見たことがあります。

このことから、すでに人間は数千年前の昔から風を知り利用していたことがわかります。

２．一番惨めな状態

利用する風が適当(風向・風力)なものであれば、申し分ありませんが、始終一定の風は現実にはあり得ません。

イギリスの科学者ジェームス・ラヴロック(Lovelock, J.E. Gaia, a new look at life on earth. Oxford University Press, 1979)は、地球は独立した巨大な生きものであると提起し、古代ギリシヤの大地の女神に因んで「ガイア」と呼び、風はその血液循環系・神経系つまり息吹きであり、一定ではないと述べている旨、ライアル・ワトソンの『風の博物誌』(木幡和枝訳,　河出文庫)にあります。日本では、幸田露伴が『水上語彙』(明治30(1897)年7月)の中で「カゼノイキツク　風の息つく　風の吹く中にて小休みすること」と述べています。

変化する風を如何に利用するかが、“帆船”乗りの大切な腕の見せどころとなります。

昔、ある欧州の大富豪が金と暇をもて余した末に、お抱えの画家に「この世で一番惨めな状態を絵にしてこい」と命じました。

画家は悩んだ末に、冷たい細雨の降るまったく風のない闇夜に、帆をだらりと下げて漂う帆船の絵を画いたそうです。

風がなければ、帆船にとってはむしろ大時化で惨めなものです。

３．機能美の極致

一方、総帆一杯に風を孕んで疾走する帆船の姿こそ、人間の作りあげた機能美の極致であるとも言います。

ジョン・ラスキン(Ruskin, John, 1819-1900)は「帆船というものは、人間の作ったもののうちで、最も心ひかれるものの一つであり、もっとも気高いものの一つである」と言います。

ラスキンは帆船の黄金期に生涯をおくった英国の文明批評家で、藝術と勤労というものを一体不可分の関係にあるものとして捉え、「勤労のない藝術は罪であり、藝術のない勤労は野獣的である」とも言います。

帆船には乗組員の生活があり、機能美の極致を保つためには、船長以下乗組員のたゆまぬ努力・勤労があります。

風が好いからといって、少しでも気をゆるすと、風の微妙な変化に対応することができません。

変化をいち早く察知して、帆の状態を調え、あるいは舵を操作して、全ての帆が風を孕むように操船しなければなりません。

油断をした結果は、帆がバタつき速力が落ち無駄な抵抗が増え、見にくい姿となり、終いには帆の破れ、関連する索具の摩耗・破断の遠因となります。

４．帆船

(Coleridge, S. T. *The rime of the ancient mariner*. Philadelphia : H. Altemus , 1889. Illustrations by Gustave Doré)

ここで勤労の中の一つについて考えてみます。

帆船の仕事の中心に滑車があります。何千年という労働の知恵に鍛えあげられ、磨きぬかれた単純きわまりない形状をしているが、帆船の仕事はこの滑車にどういうロープを通して、どう導き、どうひっぱるか、あるいはどう結び、どう止めるかにつきます。

帆や錨の揚げおろし、舵の操作、すべてこの滑車とその組合せである組滑車(テークル)を使います。

たよりになるのは自分の筋肉の力だけで、自らの注意力と判断力がこれを制御するわけです。

つまり、帆船の仕事とは、小さな力でいかに無駄なく最大の効果をあげるか、そして、いかに安全確実にスマートにやりとげるかにつきます。

全ての作業は洗練されつくし、藝術ともいえるスタイルが確立されています。

帆船が航海するとなると、人間が機械の付属品のような立場におかれている現代の工場とは異なり、あくまでも主人は人間なわけで、道具を使いこなして航海を続けているうちに、仕事をすることに喜びを感じ、生き甲斐も生まれ、自信が湧いてくるようになります。

人間が中心なのが魅力であるといえます。

機能美を追求し、ブルーノ・タウトが桂離宮について述べた、「すぐれた機能をもつものは、その外観もすぐれている」をも実感するのです。

自分の乗っている帆船の美しい帆走の姿を見る機会は極めて少ないのは残念ですが。

(アラカワ　ヒロシ)

図書館からのお知らせ

本学名誉教授岩佐美代子博士から、額の寄贈

6月12日、岩佐先生が当館を訪問、見事な刺繍の額を寄贈して下さいました。母方の祖母君（不世出の名参謀児玉源太郎子爵夫人）が、孫娘のために一針一針縫いとり、帯に仕立てられたもの。児玉家より穂積重遠博士に嫁されたのが仲子刀自、そのお嬢さんが穂積美代子すなわち岩佐美代子先生ということになります。70年近い星霜を経てなお色彩鮮明、扇に梅・菊などを配した意匠も斬新。帯をわざわざ額装に改められてのご寄贈には、深く感謝申し上げるほかありません。早速1階閲覧室に飾りましたので、是非ご覧あれ。

（図書館長　高田信敬）

アゴラ－鶴見大学図書館報－ 第122号 2006年7月20日発行
編集･発行 鶴見大学図書館
〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197
鶴見大学図書館ホームページ http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/